

11月2日
フィールドワーク

安野発電所のフィールドワークに参加して

日中友好協会倉敷支部 犬飼 繁

11月2日、日中友好協会倉敷支部の日帰り旅行に参加した12名は、中国電力安野発電所を訪問し、『広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会』のフィールドワークに参加しました。その際には川原洋子さんをはじめ、中国電力の方々にも大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

私たち日本中国友好協会は、日本と中国の相互理解と友好を深めることを目的とした、日本で唯一の自発的民間団体で、本部は東京にあります。全国に支部があり、倉敷支部では「中国語講座」「太極拳講座」「漢詩講座」「二胡講座」「中国歴史講座」など、中国に関係した講座に参加したり、「中国映画を観る会」「中国問題文化講演会」などのイベントや日帰り国内旅行、中国旅行などを実施しています。また、倉敷市主催の「倉敷国際ふれあい広場」にも参加しています。

実は私は、2月に日中友好協会広島県連合会の事務所で開催された日中友好協会中国ブロック会議に参加したのですが、その時に「川は知っている～安野発電所と宇品港における中国人殉難記録」という冊子をいただいて、初めて安野発電所における中国人強制労働の事実を知りました。日帰り旅行の企画を担当していた私は、ぜひ安野発電所を訪問したいと思い、ネットで検索していたところ、昨年10月13日に、『亀島山地下工場を語りつぐ会』のメンバーが当地を訪れていることを知り、さっそく旧知の村田秀石氏に連絡を取り、『広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会』の存在を知るに至りました。川原洋子氏にメールでフィールドワーク参加をお願いし、今回実現した次第です。

当日は予定より1時間も遅れたにもかかわらず、川原さんをはじめ、皆さん嫌な顔一つなさらず、丁寧な説明をいただきました。あらためて感謝申し上げます。フィールドワークで学んだこと、①中国電力安野発電所建設を受け持ったのは西松組(現在の西松建設)で、1944年西松組は山東省済南市の新華院収容所から300

人、青島から60人、計360人を強制連行したこと、②安野発電所から太田川の上流8キロ地点に土居取水口があり、360人の中国人はその水を安野発電所まで運ぶ導水トンネルの工事で強制労働させられたこと、③中国人は4つの収容所に入れられ、食事は饅頭一つを一日3回与えられただけで、空腹や寒さのため、過酷な労働でどんなに体が疲れていてもなかなか寝付けなかったということ、④西松組が戦後外務省に報告したけが人の数は112人、病人は269人にのぼること、⑤耐え切れずに脱走を試みた事件が4件(計21人)あったが、全員つかまり、警察による拷問、収容所での見せしめの制裁が行われたこと、⑥安野では29人の中国人が亡くなり、その中に広島原爆で被爆死した人が5人いたこと。特にけが人と病人の多さに驚くとともに、その過酷な労働の実態が想像できました。



さらに川原さんのお話からわかったこと。2009年に西松建設が安野の中国人受難者と和解し、翌2010年に安野発電所に「安野 中国人受難之碑」が建立されたこと。碑の高さは360cm、土台部分を除いた碑本体の高さは290cmで、強制連行された360人と亡くなった29人にちなんでいること。左右に強制連行された360人の氏名を刻んだ碑があり、その土台の高さが29cmであること。戦後外務省が占領軍への対応から360人の資料を作成しながら戦争犯罪の追及に利用されるのを恐れて焼却したが、心ある人が資料を残してくれた

[➡ 15 ページ下へ続く]

11月2日
フィールドワーク

「安野 中国人受難之碑」を訪ねて

日中友好協会倉敷支部 宇野 忠義

太平洋戦争の末期、1944年5月に着工、46年末に完成し、現在も加計太田町を中心に発送電している中国電力安野発電所の傍らに、「安野 中国人受難之碑」が均整のとれた静かなたたずまいを持って、2010年に建立されました。この碑は、日本軍によって捕まえられ、貨物船で日本に運ばれ、当時の西松組による山腹を8キロメートルもくり抜く導水路と貯水池、発電施設の建設という難工事を奴隷状態で強要された、中国の山東省、河北省の兵士やゲリラ、農民たち360名の氏名が刻まれており、うち29名が死亡したこと、その苦難の記録と慰霊のための記念碑です。そのことにちなんで、碑の高さは360センチ、碑銘版は290センチの高さを擁し、両側に氏名版を配置しています。

この碑は、戦争中に強制連行された中国人と雇用企業との間で2009年10月に東京簡易裁判所において和解が成立したことを期し、西松安野友好基金が設立され、翌年に建てられました。「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」(世話人代表:足立修一、事務局長:川原洋子)が中心となって管理しています。西松安野友好基金による和解事業によって、これまで6回にわたり、生存者5名を含む173名の中国人家族、遺族を広島、安野に招いて、歴史的和解の長い道のりを歩み続けています。

11月2日の私たち日中友好協会倉敷支部の見学も、川原洋子氏が、パンフレット『安野 中国人強制連行の歴史を歩く』および「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」のNewsletter No. 24(和解10周年記念集会の予告号)を使って、現地・現物での説明を交えて、わかりやすく、丁寧にしてくださり、深く胸に刻まれました。中国電力の方も説明に加わっていただき、太田川上流域の30~40キロ圏内の峡谷に9基の発電所が集中していること、その建設の一部は多くの朝鮮人徴用工、および強制連行された中国人の苦役でなされたことも分かりました。

私は、「産めよ殖やせよ」といわれていた1943年8月、農繁期後に異常分娩で母子とも命が危ないとのことで医師と助産婦がともに駆けつけて、やっとの事で誕生したそうです。天皇に命を捧げるとの父親の願いが込められた「忠義」という命名でした。ちょうどその頃から強制連行が始まっていました。もちろん、それ以前からも徴用工はありましたが。

このような歴史的な事実を隠蔽し、焼却し、没却しようとしても、人々の記憶を消し去ることはできません。過去の歴史に真摯に向き合い、学び、教訓を引き出し、相互の理解を深め、反省し、謝罪すべき点は明確に謝罪することによって、やがては和解することができる、そのことを、この碑と「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」の活動は教えてくれました。有り難うございました。

〔14ページ下より⇒〕

おかげで、360人すべての氏名がわかったこと。

また、川原さんは「日本企業で強制連行した中国人と和解したのは西松建設と、鹿島、三菱マテリアルの3社だけだ。」と言われました。岡山にも三井鉱山日比精錬所に中国人133名を強制連行して強制労働させ、帰国までに26人を死亡させていますが、中国人受難者との和解はできていません。今回、川原さんのお話を通じて、安野における中国人強制連行の実態に少しは迫ることができました。これからも朝鮮人の強制連行も含めて、学習を深めていくことの必要性を痛感しました。現在、徴用工問題が日韓関係に大きな障害をもたらしていますが、中国と和解できて、なぜ韓国とは和解できないのでしょうか。日本政府の「日韓請求権協定」で解決済みというかたくなな対応には疑問です。1991年、当時の柳井俊二条約局長は参議院予算委員会で「個人の請求権まで否定するものではない」と発言しています。